

# 触媒懇談会ニュース

触媒学会シニア懇談会

## 野尻直弘さんを偲ぶ

御園生 誠

平成27年5月29日、野尻さんが逝去された。5年余り、病としっかり闘った末とはいえ、その間も対外的活動もこなしておられたので、こんなことがそんなに早く起こるとは夢にも思わなかった。痛恨の極みである。ご家族の方々に深い哀悼の意を表したい。

野尻さんは、都立小石川高校出身で、昭和40年東京大学工学部合成化学科の米田幸夫先生の研究室に卒論生として加わられた。それが、彼の長い触媒人生の始まりであり、私にとっても彼との長い付き合いの始まりであった。当時、私は博士課程の3年であった。彼の明るく前向きで誰にでも好かれる人柄は、爾来変わることがない。彼と私はともに、研究室で野球、テニスなど各種の草スポーツにも力を入れていたので（実はそういう学生が少なくなかったのだが）、口の悪い連中から、野尻さんはマスターオブスポーツ、私はドクターオブスポーツなどと揶揄されたことが懐かしく思い出される。個人的な思い出が多くなるかもしれないが、以下に野尻さんとのお付き合いを記し彼を偲びたい。

野尻さんは、昭和43年に修士課程をおえ三菱油化に入社、土浦にある同社の

研究所で触媒研究に長く従事された。その後、三菱化成との合併で発足した三菱化学に所属し、研究企画を担当し理事を務めた後、日本化成へ移り常務取締役を務められた。触媒学会関係でも、多くの活動に重要なメンバーとして積極的に参加された。日本の触媒が華やかなりし時代を、身をもって体験しリードしてきた一人である。つくば地区に大勢の触媒研究者がいた頃に TCC（たしか Tsukuba Catalysis Club）が活発な活動をしていたが、彼は企業サイドの中心として大いに活躍したと聞く。

彼の触媒研究歴で主なものは、エチレンの酸化によるエチレンオキシド合成用の銀触媒であろう。当時は、日本の石油化学工業が急速に成長しつつあり、基礎化学品プロセスにおける収率の小さな改善が相当な利益を生んでいた時代であった。当時エチレンオキシドの理論的な最高選択率は80%という説があり（酸素種と反応性に関して、 $O_2$ 分子吸着種のうち酸素原子1個が反応してエチレンオキシド、残ったO原子種から $CO_2$ が生成すると単純に仮定した説）、実際の成績もまだその値に達していなかったもので、80%は皆が意識するまことしやかな数字であった。

その頃、彼は自分の触媒はすでにその数値を凌駕していますよと言っていたのを覚えているが、その触媒はまもなくシェルグループのプラントに実装されたはずである。その頃の三菱油化は、触媒研究が特に盛んで（多くの化学会社もその傾向があったが）、優秀で活発な触媒研究者が多くおられて、色々な機会に大変お世話になった。今成さんは野尻さんと同期である。

その後、一緒にした仕事で評判が良かったのが、*Applied Catalysis* に 1990 年と 1991 年に掲載された日本の触媒技術の紹介である。これは、ある経緯があつてメタノール法酢酸(Monsanto 法)を開発した Jim Roth 博士に勧められたものであるが、その中で、特に評判が良かったのが、各社から頂いたアンケートの回答をもとに、野尻さんが主になってまとめた触媒技術の一覧表である。内容は、日本が海外技術習得の時代から脱皮して独自技術を開花させた 1980 年代の触媒技術群で、日本の触媒技術が世界のトップレベルに到達したことを如実に示すものであった。その後、米国、ドイツの同様な紹介記事が同誌に載ったことから分かるように、海外で相当のインパクトがあつた。2010 年には、室井高城さん、出口隆さん、そして野尻さんが、その後 1994-2009 年の進歩をまとめられ、同誌に掲載されていることを知っている方は多いであろう。

比較的最近よくご一緒した仕事は、NEDO などの調査やプロジェクト支援である。野尻さんは、ご自身の経験に基づいてプロセス実用化上の課題を度々的確に

指摘しておられた。その感想は、触媒懇談会ニュース (No.6, 2009) に寄稿されている。

仕事以外の活動も多彩であつた。スポーツはもとより、合唱、口笛などのグループを組織して地元の土浦方面で最近まで忙しく活動されていたと聞いている（本人、友人から噂を聞くだけで直接演奏を聞く機会がなかったのは残念である）。学生時代に始まった個人的なお付き合いで忘れられないものに、家庭教師の縁がある。私は海外留学の際、彼に家庭教師を引き継いで貰った。彼は大変気に入られ、その生徒さんとその妹さんの家庭教師を長くされた（両生徒とも今や 60 歳代）。この縁でできた楽しい仲間は最近まで続いた。そして、その世話役はいつも野尻さんであつた。この仲間は、突然の訃報を聞いてパニックとなっている。

野尻さんとの最後の仕事になってしまったのが、野尻さん、松本英之さん、私の 3 人で書いた「新時代の GSC 戦略」（化学工業日報社）である。約 1 年かけて侃侃諤々の議論をしながらの作業であつた。最終的に 2011 年 3 月に刊行されたのだが、彼の体調が異変を少し示したのはその途中であつた。初めは頸椎手術の術後が思わしくないとのことだったので、その後、がんが見つかり徐々に進行した。本の仕上げの頃、体調ゆえに思うように筆が進まず、共同執筆から降りるとの申し出を受けたこともあつたが、そうであればなおさら是非にとお願いして書いてもらった。野尻さんが主に担当したのは日常生活における GSC で、いわば、幸福論である。誰もが情緒的な意見を言って、な

かなか議論がかみ合わず困っていたが、野尻さんが頑張って何とか格好をつけてくれた。

この頃の野尻さんのがんに向かう姿勢（勉強と努力）は誠に立派で、おおいに感心させられた（私が言うのも僭越だが）。その結果、快方に向かっていると聞いたのはそんな昔のことではない。その後も何回か会っている。最近まで早く治してまた会いましょうと電話やメールを頂いていたので、野尻さんのことだから最終的には大丈夫だろうと勝手に信じていた。この度のことは全く想像もできず彼には大変申し訳なかったと悔やんでいる。

彼の人柄を偲び、長年付き合ってもらったことに感謝しながら筆をおく。野尻さんありがとう。どうか安らかに眠って下さい。

（付記）触媒に限らず野尻さんとの思い出がおありの方は多く、私の書いたことはごく一面であろう。皆さんの御寄稿を見させていただきたく思う。

2015. 6. 24